

故穴のきわに石をすへ置事也、又玄關ひさし下に、片口にて手水を廻し、御獨々々かわるゝ御手水候へと云もよし、塵穴の時も同前也、其時は客衆ひとりゝたちて手水すべし、故實口傳、雪の夜會、露地の燈籠は、凡とぼすべからず、雪白きにはうばはれて見所なし、光うすし、但露地の木だら様子に寄て、一筋には云がたし、花は古來用捨す、梅はきやうに寄すべし、火相常より強うしてよし、香爐杯出して可然、常よりは大振よし、手をあたゝむる心あり、風雅人は詩歌もよし、

〔茶之湯六宗匠傳記〕^四雪之茶之湯之事

一雪之茶之湯といふは、初雪の事より傳授故、あらわには申がたし、第一雪は十月比初ゆきふる也、雪ふる朝茶之ゆ者は、我が方に爐に火入茶をまかけおき、雪を見て歌をよみ詩を作、常の習とす、釜を仕かけおけば、おもふどしの人見舞にくるなり、是をよび入、雪ごと云て珍敷存候、それ故に釜をまかけ置申とて、うす茶をたつる也、我も吞仕舞申候、其とき客、さらば我等侘へ御同道可申とて、先へ出らるゝ、てい主釜仕かけ置往時、道すがら木々の小すへにゆきのかゝりたるを見て、雪ごとをほめつれ立往ば、ほどなく向へ付たり、そこにて又薄茶吞などする内に炭をする也、さて料理出し、酒も能かげんにのみ、湯出ると茶菓子喰、手水に立て、どらなると床敷舎内に茶具、茶あるを、如常みて座に付を、てい主出て濃茶をたてらるゝ也、總菓子迄くひ客立なり、是を雪茶之湯之大事として、印可條々内也、

〔茶傳集〕^六雪掃除心得の事

- 一雪雨の時は、外露地に竹の子笠を、客の數程一ツニ重ね、又下駄も同前に置べし、但置所不定、物に不障所に置べし、書院より露地へ出候時は、雪駄より下駄を置いて吉、
- 一雪月の夜は、客早く來るもの也、子細有事なり、亭主も其心得して、可待事なり、
- 一寒氣の雪雨には、客露地に久敷不置様、急ぎ内を仕廻呼入が吉、